「教員養成GP（グッド・プラクティス）」の採択と実施

教員養成GPプロジェクト

本学は、教員養成のための優れたプロジェクトに重点的な財政支援を与える文部科学省の事業「平成十七年度大学・大学院における教員養成推進プログラム」（教員養成GP）に採択された。これは「平成十五年度特色GP」に次ぐ二度目の快挙である。特に教員養成の単科大学である本学にとって、この「教員養成GP」に採択されたことは大変喜ばしく、同時に、教育実践や教育現場へのより一層の貢献を社会から強く期待された結果であると思われる。

教育実践における「鍵的場面」への対応力の育成

本学が申請したテーマは「鍵的場面での『対応力』を備えた教員の養成―提携校を拠点としたテトラ型チームで取り組むプログラムの開発と実践―」だ。どういうプログラムなのか、簡単に説明しよう。

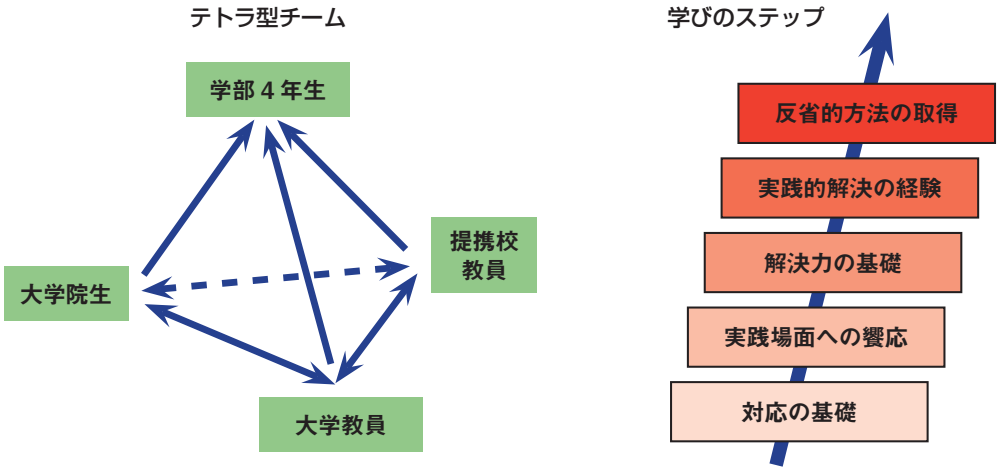
調印式にて

今日の学校現場が新人教員に強く求めている資質能力は、児童生徒、保護者、同僚に対する「対応力」だ。例えば、「集団行動が取れない子どもがいたらどうしたらよいのか」「給食費を払わない保護者にはどう対応したらよいのか」「教育方針について意見が合わない同僚がいたらどう歩み寄ったらよいのか」などだ。こうした問題は教育現場で発生する頻度が非常に高いにもかかわらず、これまでの教員養成ではあまり扱ってこなかったものといえる。ある教育委員会人事部の採用担当者も「授業の技術や教科内容は教職経験を積みながら学べばよい。けれども対応力、特に保護者に対するそれは、教壇に立ったその日から必要になる。その力を付けさせて欲しい。」と大学に要請してきている。

そこで、教育実践の中で遭遇する様々な場面、特に「適切に対応しなければ後に重大な状況に陥る可能性のある場面」や、逆に「適切に対応することにより、後に極めて良好な教育効果が期待できる場面」での対応力を養成する本プログラムを計画し、実践することにした。そして、このような重大な場面を「鍵的場面」と呼ぶ。

チームによる教員養成のスタイル

さて、こうした対応力は机の上で本を読んだり、大学で講義を聞いたりして身に付けるものではない。また、対応のマニュアルを求めてもそのようなものがあるはずもない。現場のあらゆる



提携校を拠点としたテトラ型チームで取り組むプログラムの開発と実践

場面（授業のみならず、給食、掃除、行事、職員の各種会議、保護者会など）に身を置き、実際に起こる現実を見、感じ、行動し、考え、反省し、再び行動する、といった経験と学習を、教職に就く前に積んでおく必要がある。

そこでこのプログラムは、近隣の小学校と提携し、学部生、大学院生、提携校教員、そして本学教員の四者によるチームを組んで、その提携校でのインターン形式によって行うスタイルをとった。四者によるチームなので愛称を「テトラ型チーム」とした。一人の教員を大学が大学で養成するのではなく、現場と大学によるチームが現場で育てる、という新しい発想である。

実施と成果

本年度は、奈良市立飛鳥小学校、済美小学校、椿井小学校の三校と提携を結び、各校1つずつの計3つのテトラチームを組んで、11月から12月にかかる4週間で実施した。まず各チームは、取り組んでみたい鍵的場面（それを「課題鍵的場面」と呼ぶ）を1つ予測設定し、実施前から意識を高めておいた。加えて、実施期間中に遭遇する予期せぬ鍵的場面（これを「遭遇鍵的場面」と呼ぶ）について対応の実習を行った。

学生は一日が終わると、今日はどのような鍵的場面があったのか、それはどういう要因で発生したのか、現場の先生はどう対応したのか、自分だったらどう対応しただろうか、あるいは自分が実際に取った対応はどうだったのか…などをまとめる。まとめた内容はデジタル掲示板に記述し、学生同士や担当大学教員との間で質疑応答をしたり、議論したり、時には励まし合ったりした。

またチーム内で毎日、あるいは決まった曜日にミーティングを開き、さらに深い検討を行った。鍵的場面であったことにすら気付かず見過ごしてしまったことや、子どものとった行動の背後にある見えない要因、同じような行動であっても子どもによって対応の仕方を変えなければならないことなど、学生は多くの現実と対応の難しさや複雑さを学んだ。また、提携校の先生が過去に経験された鍵的場面や、それに対して取られた対応の内容や方法、さらには、最近の社会情勢を反映したような新たな教育問題などを知ることができ、まさに現場のリアリティの中で、もし自分が教員だったらどうしたらよいかを考えることができた。

廊下に水がこぼれていて給食当番の子どもが転び、給食のおかずが食べられなくなってしまった。さあ、どう対応する？

教員養成ＧＰプログラム成果発表（事後指導）の模様

今後の教員養成に向けて

このプログラムに参加した学生は、教育実習やスクールサポートとはまた別の教育実践の厳しい現実を体験した。迷いや悩みの連続だったかもしれない。鍵的場面の対応の難しさは、瞬時に適切な判断を下さなければならないことだ。その判断を誤ると、たちまち子どもや保護者や同僚とのコミュニケーションが崩れてしまう危険性がある。しかし、現場に出たら鍵的場面の遭遇は避けられない。勇気と自信をもってそれに立ち向かい、適切な判断を下すには、その教師の内に豊富な資源が蓄えられていることが必要だ。その資源となるものは、鍵的場面の遭遇そのものと、それに対し深く考え、悩み、冷静に省察した経験の量と質だと思う。このプログラムはその機会を多く提供できるものなのである。

来年度はさらに多くの学校と提携してテトラを増やし、大学の科目として単位化させる予定だ。教員採用率が高まっているが、そんな時にこそ、本学は、質の高い実践的力量をもったタフで明るい教員を多く世に出すために頑張っていきたいと思っている。

URL http://www.nara-edu.ac.jp/KK/2005GP.htm